

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9

第五門

三十六卷

第六卷

291  
7  
1-36

三河志

三河

渡邊政香輯錄

A295	A291
17	
1-36	

三河國觀音之捨之所札所とて碧海部赤城中根氏著也  
 刪補松本史記此等史之捨之所觀音の巡行所今の次第と  
 同し其次第具院に按

知果文化会  
 昭 33.7.30 和  
 37426

牙室舎此十卷日相傳華山法皇以有靈夢長徳元年三月  
 十七日始詣於熊野六月朔日至谷汲以此為順禮之權輿又

按法皇順禮事不載于史傳

唯謂畿内近国行旅也此時有熊野社々御參詣乎恐不可  
 拘三十三所也

好事者後定序次者乎順禮當作巡禮非順逆之義而巡行也

拾芥抄日雖有三十三所以六角堂為初以那智當二十一而  
與今次第不同蓋觀音有靈驗也古今不少都鄙盛修之  
或云關東不拘老若而既巡禮者列上座未巡禮者乃居下  
坐矣華山院十七即位後納三妃為女御然皆不得獻顧  
聞ツナコト恒子大納言為光娘之容貌絕世納之為妃寵過甚厚弘徽殿女  
御是也無幾日完和元年恒子薨去六月焉帝不堪哀愁自此怠  
朝政生喜世志落飾號入在位二年竟歲十九後行五畿内近国還  
洛於是慕鷹司四君女每夜密通長德三年藤原伊周嘗通  
彼姉三君故疑誤射法皇矢中御衣袖後事竟流伊周兄弟  
下略

三河國觀音巡禮次序完文十成本と積樂と後世の  
撰亦て此志載毎子河のぬとか子小兒の若索もる如如也ハ  
如く也志の於り總て此一志に池次礼上の志也月し  
或曰西國巡禮と云ふ事より稀なる如く東國の者ハ伊勢ハ糸織ノ事より  
巡礼ハ信長並伊勢ノ類ハ其於智と一處と云ふ事より如くしと云

三河國觀音三十三番札所

夫觀世音菩薩三十三身小る人——此世と彼岸の如く深き  
事ハ物知しる人のゆかりと志るは古より西よ三十三所とて觀音の  
一二と名付札と打順札とあり——二世安樂と頼みとて世頃いふくわふと  
亦志るのこゝろ男女歩むと運ひ世後の世の祈り怠る事なくと又友か  
三河の源に縁ふ——是等海郡古城邑の中根氏或夜の曉に常と親  
世に任るの何の形身とともひ三か所大難とあり——進つると進めし  
と心と我の等し人あはれと事し——たかぬとこころとせと  
送らぬとあり——相り世捨人といふつと進め世一と進めしとあり——



五番 滝原郡吉田指原所 如意輪觀音

普門山觀音寺

淨土系

如意輪のよき信くぬじくくや吉田の觀音さうね

六番 滝原郡吉田舟所 如意輪觀音

檜山龍運寺

淨土系

なごき世と救ゆる人觀音の大慈のふくは龍運さうね

七番 宝飯郡小坂井村十子觀音 弘法淨地 大門口鞍恩寺

禪曹川系 堂二る半三回自吉田一里 和名武敏の石塔あり

まのゆり月と一峰此業所さもおとらぬ慈悲の觀世さうね

八番 宝飯郡財賀村十子觀音 行基淨地 陀羅尼山財賀寺

真云古義寺領百六十二石 堂六間四面 小坂井より二里余

財賀さうね十子の祈さひお母ととあつて来たたふ山さうね

九番 宝飯郡御油宿十子觀音 行基淨地 慈雲山觀音寺

財賀より一里半 宿より三丁南

油宿より一筋さおむ觀世さうねと助けをい

拾番 宝飯郡赤坂宿中町聖觀音 聖徳太子御作 三頭山長福寺

淨土系 朽木の尺お寸恵の作堂二る半ある後山が寺なりや宿石と云

物とふれく何ゆととこぬき福さ大慈のまうりおく赤坂

拾一番 宝飯郡西郡清田村十二面観言 安河原作

青衡山慈恩寺

比丘尼寺也嘗三河四河

観音日させひ清田と過りハゐの歌日名入海

因云南村浄土系各樂寺庭小部於松とく十四百蔓延し丸名木有  
自是形系上のるカシコ坂と云傳と大畧大公有甚多忠隊ト云

十二番 宝飯郡形ノ系上野聖観言

利生院

浄土系從自<sup>世</sup>聖峯と一里中 元知<sup>次</sup>ト云傳取立文故ナリ観言ト云

乃れおのそれめを心利生院佛の指しつり形の系

十三番 幡豆郡寒峯聖観言

行基作

寒峯山観言寺

山のりり事十七下りり急降 兵多ぬ伊勢又向し絶景の地也 名ぬ二里

奉迎の必わんをうぬハニ子根と傳立り人々

十四番 幡豆郡高根村聖観言

弘法作

南向山観言寺

浄土系 是より 饗食場村と一里

二世中々も救わんをわりと説き九人抄をひれぬし

十五番 幡豆郡饗食場村聖観言

行基作

二杉山安樂寺

其かきき法ふあひしく法ありたのめり人の身ハ各樂寺

十六番 幡豆郡上所村北名瑞観言

定教作

瑞鏡山実相寺

禅修院流

因云華嚴供養井ヨリおきりト云當古汝下の景河

観言ハ日向の苑の色くおむくも法の真相寺く如

十七番 幡豆丸熊子村

如言瑞観言行基作

観音堂

久麻久社

今稻荷大明神と云

境内より堂四四面

熊子と云むむむむの形もとややみは熊もたぬ観言

十八番

額田郡龍泉寺村馬頭観言

行基作

妙雲山龍泉寺

日蓮宗堂二る四面四丁丁東の山に在り佛神の寺に安んず盗賊の能く是れを  
守りてはとる人への垢もぐんと法の水汲龍泉寺と云

十九番

額田郡高澄寺村聖観言

行基作

多宝山高澄寺

嘗て高澄寺侯は佛と云可山阿箱柳の外里ナシ遠く是れを西の山に  
成佛と云観言の觀るれはそれと云く之は高澄寺と云

二十番

額田郡滝村聖観言

昭光定朝作

吉祥山亀井院滝山寺

天台宗古領四百十二石堂二四面三丁南流り北龍泉寺と云は及び者

此が天竺流の中より某作堂と云く是れアリし是場之寺什物

及び者錫杖

道凡真蹟額

鬼伎面

雲慶作  
三面アリ

板乾鞆

海留鴉女の琴

太閤床机

千ノ古シノ大王

彼年行安長刀

紀政常長刀

此作の感々々新造之南之某作元々所及ハ正観言と

廿一番

額田郡真福寺村聖観言

行基作 靈鷲山真福寺

大善院

古一の長此と云く是福寺某作と云小利正観言

天台宗古領三百石

坊舎ナリ

院敷院南谷坊

廿二番 額田郡大門村聖觀音 行基作 向上山福門院大善寺

淨土宗

新ひゆる身と極樂此大門小邊守りく南無觀世音

廿三番 額田郡鴨田村十一面觀音 行基作 成道山松雲院大樹寺

淨土宗寺領者不塔額二百名於合七百名堂二名半尾音

松平親忠云寺建立法名松雲院敷大園西志大居士と号ス

公儀法代と云寺者 井村甲申 家康云御馬の足跡あり

佛より成道山の大神と弥陀信とも亦觀音の慈悲

廿四番 額田郡伊賀村多居前 十女觀音 觀音堂

堂二間四面

いづかの遠く人向の海より千女といは流し清め

廿五番 額田郡能見村 十二面觀音 慈悲山觀音寺

禪宗家堂二名半堂音

於夕々後世のこの山の觀音と又現世ともたのこ是所

廿六番 海部郡西牧内村 聖觀音 定能作 海岸山聖禪寺

禪曹川 延喜寺永十丁

初秋後夜の勤も終次聖禪寺清めり終も十丁の村

廿七番 海部郡富永村聖觀音 行基作 富永山觀音寺

富田云堂二名四面富永より大溪寺堂一里更より知立二里 未述

八幡三四丁 あり いづれも富永の觀音寺に堂とも折るひれ也

廿八番 碧海池 龍鉾名東入

馬頭觀音運慶作

福壽山 慈眼寺

禪室を分後投と六里余 葦路に出駒場通上京村と三里此間里

ナシカゴ川ト云流アリコヒキ村北ニ後投ノ鳥居アリ是ヲ禁の社と二丁

觀音の所前此札の文字見逃ち致ハ古字ハ池の龍鉾

廿九番 碧海池 野辺村

千手觀音行基作

千手山 淨院院 福林寺

淨土堂二回三回萱音位を押鴨二十丁

法の杖の如く至らやらの村まればゆると安樂のせや

三十番 碧海池 野鴨村 十一面觀音

野鴨山 遍照寺

淨土堂は長興寺ノ二里ノ道  
觀音の所前と相むるも名は野鴨の也

三十一番 長興寺 村十一面觀音

慈光大師作

集雲山 長興寺

禪濟泉 門前ニ池松ト云名木アリ是ヨリ奉母二十丁

まかきや大慈大悲とせよ永く此に依り奉母の法は

三十二番 加茂郡 奉母聖觀音

行基作

歡喜山水音寺

志云古義 堂二面 晋門院ト云山伏ちて女を後投ニ里半

山の名をいさみ 依り衣川の流も清き水なるなり

三十三番 加茂郡 後投の社 比有

聖觀音堂

志云今之河間後投ハ河一ノ大社領七百七十六石奉母大確命

社一人祓官十人社家三社社信十ヶ所志云各五十石

西宮東宮 二社

惟礼のふとよご文々余の札と振投の納免奥の院うね  
右三十三所近年法華の教通あり是は古来と月の詠歌  
寛文十戌年中根八右衛門常延徳之序も人作  
巡路の遠巡番一致せは弘法行基作佛あり疑くハ  
佐一紙

熊野大権現八景詩歌 長山邑 矢保邑 兩郷神社

豊川飯帆 今号吉田三河一也

漸々天涯去不窮 浮雲流水蹴波紅  
松青鳳舞初掛月 帆  
遠龍盤自在風 重疊樓其互皆  
蜃氣依稀煙火是漁翁  
空山漠々彩霞徹 影方鬚滿湘  
勝畫工

幼紅の往来此業と世と後舟志帆の影  
河豊川の浪  
空いそおるを帆り豊川の浪のるれく  
之舟人

星野落鷹 今在行明邑四蹟

叫落瑤池星野鴻水紋如穀護生風  
梅飄餘片浮香氣日階



風動青霞上下通  
乱彩布函斜日麗  
餘光徹野落陽紅  
行人多少晚煙裏  
應坐澄明圖畫中

吹やぬきやせうをくはる柳ありしよき心ともかき

物々縁荒も及ふ形なくかりやせいのそくはま柳の系

官路夕照

赤坂馭の山

瓊樓射日黃金彩  
却望平原官地遠  
露灑旌旗雲外出  
風迴巖岫雨中傳  
光霞半落天河水  
暝色全低月樹前  
馭路西連東海景  
夕陽同處有紅塵

元氣は清く子持の抱はれぬまゝ路の山の夕日よ次は

暎る此心(や)れり免夕附日さ清くや路の山も秋も

渡津夜雨

小坂井より前芝の邊と云

一万頃曠晴東海隈  
凝華秋氣入樓臺  
江間波浪夏天湧  
塞上風雲接地開  
白馬津邊今夜雨  
黃河曲裏日光催  
遙臨淑景移小坂  
屢對瀟湘酌賞杯

終夜心ももれ次路雨をせと志るまかの流りいそく

文如りう身、えう次は此するの面ふりし種はぬきとるん

三明晚鐘

今の三井寺

漠花鐘聲暮色分  
凌霜萬戶一城開  
虛心應物蓬萊殿

大扣微風鴛鴦群近雜雞人銀白露新傳鬼氏玉黃雲  
豊川名跡誰能識流聽抱明拂曙薰

ぬなまやまのほろひもとほし廿ふらちの入おのり  
池のふかきすむかひはちの入おのりもよふかちり

西城吉良観世音菩薩順礼

寺傳村後邊改香寶曆二年壬申  
季秋依人需齋效記以定巡拜次第

一番 寺津村大悲房

ぬららやうちの波もてはる大悲のほろく称名

二番 日村金剛院

ふらほのちみわらとるよいのらとまらまらんがく

三番 日村おきま

何うも記折をさふ日のかのあまを人そぞたるとま

四番 長海村瑞鳳石

たらいの海まうやく夕陽や海平山の入おのり



十三番 無名根村観音堂

飛松ふらふら海に観音堂あり山のみまを海よりさうと称

十四番 平口村修治寺

修治寺のむらあつて修佛の苑もあつたのり此の修治寺

十五番 中田村長久院

寺の東の大梵深をくんで人なるひさしとていふなり

十六番 道日花村福德寺

福德寺の西のりむらかみちひさしとていふなり

十七番 行利村樂音堂

いふなりとていふ行利村の樂音堂とていふなり

十八番 計原根村修福寺

修福寺の福とていふのり修福寺の莊嚴とていふなり

十九番 長繩村観音寺

修福寺の先徳がし清折といふなり修福寺の長繩

二十番 母屋村観音堂

本堂のちまるといふなり母屋の花のうらやまといふなり

廿一 須賀村 記す事

古の記に云く須賀村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿二 西尾村 記す事

古の記に云く西尾村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿三 徳次村 記す事

古の記に云く徳次村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿四 高田村 記す事

古の記に云く高田村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿五 能登村 記す事

能登村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿六 高田村 記す事

高田村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿七 西尾村 記す事

西尾村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿八 西野村 記す事

西野村は古く大志大徳の地なりと云ふ

廿九番 南小間観音堂

あちちのめづる所の所をつれ南に少らの尊照大光

卅番 西場観音堂

冥途の境と違ひて不始路の境をえらう北に少の尊照大光

卅一番 尾尾村観音堂

おのれよみのり北道に尾尾村の佛のちうひあつたをえらう

卅二番 平坂村降教寺

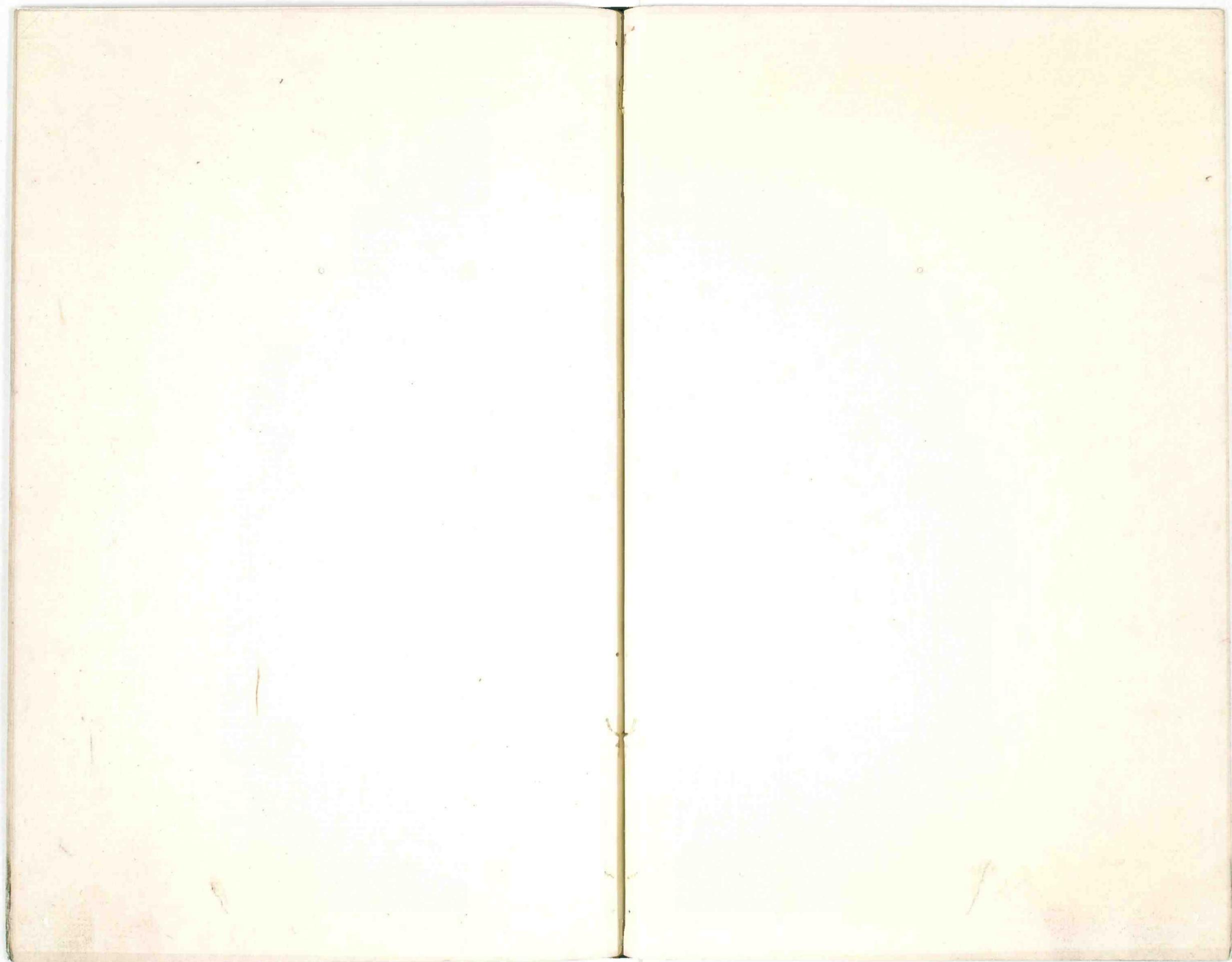
この御堂はひさしく平坂にんごぶあゆみも十二国家

卅三番 上矢田村虎洞山権堂

皆人のたつてまゝ虎洞山大いぢひのふふちうぢと

卅四番 徳永村おき堂

今とちの志とてまゝまゝし西堂と免今つ細ひの身とを徳永



十



謂邑也國人對曰八代縣豐村亦尋其火是誰人之  
火也然不得王茲知主教非人火故名其國曰火國又按

**古事記傳**五卷其火の事お人の説云う肥後玉の海は松は  
せの澳と云と云云云云此火の事お人の説云う肥後玉の海は松は  
末より八月の夜おそるあるうち八月朔日の夜は殊多  
し宇土の阿そく此山よりくく見こるるなりを此と云世に批  
燈と云物の大サアルゆる火初より二つ何と云と共やうやく不  
分こと粒多きをゆきとくはるなりを幾お百と云云此  
大い海上豈様三四里のほどお一を倍とみぬ火のなるなり  
凡ゆる火はくぬく雨ぬる夜は見えぬと云其火のゆゆる

ゆゆる其海と付来船と遠く見渡せば火の中と行と云ゆる  
と船よりいささくは火見えぬことぬくぬくぬくの如くあること  
按

**冠辞考**四卷七葉 ちりぬの於景行紀曰云云  
同類書曰今の世おとも此國の海上は火は光り阿と云り此  
事ハ土人は同倍し按

**陈書考**云西天ノ沙海ノ一隅常ニ出火とゆる元特沙門是と  
名付て修羅の火と云畢克修羅の業火真如淨法相の海  
相尅此幻火と説了世と以て案する時日本の筑紫の火も  
沙海の火と云と云修羅の火といふと云と世人得と云ぬ

火と云ふ事一に疑れしと思ふ虎關禪師の徹睡録の  
三卷 七五下に書きたる信借虎關禪師の辨と云ふ考ふる  
成程他羅と云ふぬ火と古の人と遠く申疑然し但  
歎書ありと云ふハニエウと云ふと和名と假名と通ひて云ふと  
又とハ是もノと又と假名通ひる故と云ふと物の云れぬと云ふ  
亦云下ぬ火と云歎の心と通ひて其歎書此心ハ云ふ  
セよ常云すハ本語の通他羅火と唱ふよしと譯書考ふる云ふ  
因云日知紀の火ハ神火云々天皇此泊る地と知る也給ふ  
古事記傳肥後の海ニ相ばせの澳と云ハ此ニ就燒と云ふ又譯書  
考の説ハ今西三河海中の火の類なりし

**倭漢三才圖會** 七十六卷 上野國雷電山麓有池每兩暮出  
泡燒其數幾千上于松枝謂之泡燒松未知何火又按  
**一宵話** 第二編 十一卷 或年六月廿六日知多の浦より海に船  
海中にて火の光れたるは行遠き其火れ中は鬼人  
影しるをえたりといふけ火の中より物と平家此亡  
魂ありと譯されしもの何れゆへにも船きよりの所へ  
由れしありは肥後の志すぬ火ハ世火なりあるらん世を  
ぬ火と景行記亦五月の下の志すこれきよと月此得る  
もいふ今も年々六月の末より八月をもちるあり申七月  
廿九日八月形りけりといふと極最中と云ふ海中の境守書中の炎

天よこぢも亦晦日の暗夜よりいりまじりて日一も海  
あも本ハ淡<sup>カ</sup>ありある天日の湯ま焦げと鹹ありあせり  
とれ鹹ありそ火と消えんとそちとけい却て火えとあけ  
の耳酸苦辛の四味ハ草木はあせ鹹味ハ海水よりぬるそち  
心海あり杖撃之火星勃然そちと化篇のせ陰火酒<sup>ヒ</sup>  
文選の海賦といひ元微之が海夜火燐々<sup>ヒ</sup>他は皆海  
ありの火の如く光るあり知多れ船の火中物<sup>ヒ</sup>のえい<sup>ヒ</sup>  
就のうはしとそ変化<sup>ヒ</sup>あそん事<sup>ヒ</sup>目<sup>ヒ</sup>年<sup>ヒ</sup>魂<sup>ヒ</sup>  
も源氏の道<sup>ヒ</sup>あそい<sup>ヒ</sup>  
此知ぬの浦の怪火と漢人の篝火となき乱髪と短<sup>ヒ</sup>り居る

とえ騒ぎまたるありとそ怪とえと怪とえと怪と  
自消のもの

一説はあそぬ火ハ海月奥れ光るありとふ

常人の説も海中の火ハ皆奥の光りと云

あそと奥辰虫と陰はあけ火光あるとそ人夏秋のそと

よれを前説とよしと所又ある所ハ大抵定りのちとれ後説とよしと

一夜活首書曰海あり雨後は暫めあそい

月曰石首魚殊る光るもの

世説よよと塩をまける中の火天よよと潮ありのち  
あそい魚のあそいなりと云

東遊記云越中新川郡眼月山<sup>サハク</sup>尔七月十三日夜立山の頂より来りついで海中より来るといふ是ハ新川郡岩岫村の龍燈と云

三河玉宝飯郡津津寺<sup>ツツジ</sup>の寺より火の如く光り出たり是ハ龍燈と云

一種天狗火といふは龍燈といふ異なりは僅又此の如きものもあらずは徳藏輩或は舟人とも笑ふといふは其の侍の事<sup>ツツジ</sup>も早し其火の多し規<sup>ツツジ</sup>も異なり吳人何の漢人は其の<sup>ツツジ</sup>も早し其火の多し規<sup>ツツジ</sup>も異なり船と返ると漢せは是ハ天狗の漢獵<sup>ツツジ</sup>なりと云

事大方<sup>ツツジ</sup>なり

刪補<sup>ツツジ</sup>相云東三河辺雨夜只高山より挑燈<sup>ツツジ</sup>の火出ると言ふ其火数百合と数し天狗は徳藏<sup>ツツジ</sup>と云勢別<sup>ツツジ</sup>辺悪路神火<sup>ツツジ</sup>と云

世は天狗と稱する數るの説ありと云

倭漢<sup>ツツジ</sup>二才<sup>ツツジ</sup>會<sup>ツツジ</sup>三卷<sup>ツツジ</sup>日本紀舒明天皇九年二月十一日大星從東流西便有音似雷僧曰天<sup>ツツジ</sup>此流星是天狗之是<sup>ツツジ</sup>有蝦夷兵<sup>ツツジ</sup>又格

藝苑<sup>ツツジ</sup>日涉<sup>ツツジ</sup>云凡<sup>ツツジ</sup>物名天狗者不一而足矣

史記天官書天狗如大奔星有聲其下止地類狗所墮

三代美錄云

光孝天皇仁和元年六月廿百出羽秋田城中及飽海郡神宮西濱降石鏃

同二年二月飽海郡諸神社也降石鏃羽列飯盛塚奧列鳥海山常列鹿嶋及佐渡等之北地于今有捨取者俗謂之天狗鏃其形恰如鏃云

及望之如火光炎々衝天  
南竺書天文志曰永元三年夜天開黃色明照須更有物絳色如小甕漸々大々如倉廩聲隆隆々如雷墜大湖中野雉皆雉世人呼為木殃

史臣桑春秋緯天狗如奔星有聲望之如火見則四方相射

漢史云西北有三大星如日狀名曰天狗天狗出則人相食天官云天狗狀如大鏡星又云如大流星色黃有聲其止地類狗所墜望之如火光炎々衝天其上銳其下丹如數頃田見則流血千里破軍殺將

漢史又云昭明下為天狗所下兵起血流

昭明星也

洛書之昭明見而霸者出

運斗樞云昭明有芒角兵徵也

河圖云大白散為天狗

漢史又云有星出其狀赤白有光即為天狗其下小無足所下國易政衆說不同未詳孰是推亂亡之運此其必天狗乎

述異記曰康熙壬子四月廿二日黎明錢塘西北鄉有孫姓者門尚未啓隣人夙起見孫屋脊上有一物似狗而人立頭銳喙上半身赤色腰以下青如龍尾如篲長數尺驚

呼孫告之甫開門其物騰上雲際忽聲奔如霹靂委蛇屈曲向西南而去也上火光迸烈如等之掃天移時乃息數十里內皆聞其聲亦有仰見其光者所謂天狗墜地聲如雷也甲寅有有逆藩之亂

又星經龍尾九星之一有天狗是星而名天狗也

酉陽雜俎龍王身光曰夏流迦此言天狗是龍而名天狗也

山海經陰山有獸焉其狀如狸而白首名曰天狗其音榴榴可以禦凶

杜甫天狗賦色似狡狴小如猿狖

王鼎焚椒錄懿德皇后母耶律氏夢月墜懷已復東升光輝照爛不可仰視漸升中天忽為天狗所食驚寤而后生

汪若海麟書天狗電落注天狗所降以戒守御示其光如電

佩文韻府引三秦記曰白鹿原上有狗枷堡

秦襄公時有天狗未下其上有賊天狗吠而護之故一堡無懼心

本草果食物本草曰山狗獾形如家狗脚微短好鮮食果食皮可為裘有數種在外有之蜀中出者各天狗是

皆獸而名天狗也

**爾雅**曰鵠天狗註小鳥也青似翠食魚江東呼為水狗是禽而名天狗也

**天中記**曰天狗人參也是草而名天狗也

**物理小識**曰落星為石象狗首便曰天狗是而名天狗也

**伊世珍瑤環記**曰君子國有鳳皇嶺出天狗一名胎詹女仙與族雪道君各以玉膏鍊成上茶以相饋遺是仙而名天狗也

我邦一種有名天狗者世所傳僧人化為天狗者往往有

焉猶道家所謂白日飛昇之說此或似瑤環記所載而其類非一今指變翹魎之類愛幻無常者槩稱天狗要不可窮詰其為何物如俗間所圖冥忘誕無枕骨固無足取者物徂徠天狗說服子遷高雄山移文頗說其情狀大抵婦女及污穢者犯其棲則寸裂支體投林聲或與風雨擲瓦礫或掠接蠢漢癡童而去三五日或旬月而返失心如木偶術士遂矯飾怪妄之說以售其術者亦不為不多今金峰高野湯殿白山比叡鞍馬諸山稱為多此怪比叡山僧其嘗語余曰嚮者見佛殿上有巨人跡大二三尺許皆右脚之

痕耳山夔一足之說蓋足徵矣

按魯語曰木石之怪曰夔

**說文**曰夔神虺也如龍一足从久象有角手人面之形

**正字通**曰抱朴子曰山之精狀如小兒名蛟一名韶空

**白澤圖**曰山之精名夔如鼓一足能行可使取虎狼豹

五色線曰南康記山間有木容形骸皆人也但鳥爪耳

巢於高樹伐樹必害人一名山肖

**抱朴子**曰山精如小兒獨足向後夜喜犯人名曰魃呼其名則不能犯也

**荆楚歲時記**曰按神異經云西方山中有人焉其長尺餘一

足性不畏人犯之則令人寒熱名曰山臊以竹著火中

焮燂有聲而山臊驚憚玄黃經所謂山獠鬼也

**太平廣記**曰章仇兼瓊鎮蜀曰佛寺設大會百戲在庭

有十歲童兒舞竿抄忽有物狀如鷓鴣掠之而去群衆

大駭因而罷樂後數日其父母見在高塔之上梯而取之

則神彩如癡久之方語云見如壁畫飛天夜叉者將入塔中

日飼果實飲饌之味不知其所自旬日方精神如初出尚書故事

**魏群**張承吉息元慶年十二元嘉中見一鬼長三尺一足

而鳥爪皆有鱗甲未招元慶恍惚如狂游走非所父母持之

俄聞空中云是我所教幸勿與罰

出異苑

戶部尚書韋虛心有三子皆不成而死子每將出則有大  
面出牀下噴目開口貌如神鬼子懼而走大面則化為大鵝  
以翅渡擁令自投于井家人覺遽出之已愚猶能言其  
所見數日而死如是三子皆然竟不知何鬼怪

河東裴鏡徵會一武人其居相近武人夜還莊操弓矢方  
馳騎後聞有物近焉顧而見之狀大有類方相口但稱渴將  
及武人武人引弓射中之怪乃止頃又來近又射之怪復住斯  
須又至武人遽至家門已閉武人踰垣而入後自戶窺之  
怪猶在武人不敢取馬明早啓門馬鞍棄在門馬則無矣

神社考六卷我邦自古稱天狗者多矣皆靈鬼之中其較

益無紀聞

著者相稱曰天狗是非尤旗星之義也其類中鞍馬僧正為  
巨魁世之所稱鞍馬山僧正愛宕山太郎比良山次郎伊都奈  
三郎富士太郎上野妙義坊常陸筑波法印彦山豐前坊  
大山伯耆坊大峯善鬼金平六比叡山法性坊肥後阿闍  
梨葛城行者高間坊高雄內供奉如意嶽天狗此等類  
甚夥或為狐或為童或為鳩飛行或為僧為山伏出于人間或  
為鬼神貞或為佛菩薩相時々出現其說曰見人福則轉為禍  
遇世治則復為亂或發火災或起劇諍歷代天子之中讚  
岐院為金色大鸞長一丈餘後鳥羽院為被髮長翼  
之沙門後醍醐院為高鼻勾爪之王業五諸龍車其餘

猶多。又沙門之有慢心及忿怒者多入天狗之中所謂傳  
教弘法慈覺智證等皆是也。柿本僧正入高雄峯起  
大慢心為大郎坊或曰和泉堀側有與紀僧正同名者以  
我慢心死而為魁尊意者與群鳥同翔於橫川之杖慈惠  
者著甲冑攻三井寺燒千手院覺鑊得造作魔鬼心營傳  
法院高野衆徒念而鼓譟攻鑊房不見鑊而見不動衆  
徒曰是必鑊也飛石中不動時血流衆徒大呼曰非狐狸  
非天狗非不動是覺鑊也其後多武峯方等法師在  
言曰吾是覺鑊也怒自睨人取火箸燒爐中手自弄  
之日我始作即身成佛之印是两部秘奧之印明也又初

堯信為天狗言而告慶圓曰吾是中院僧都也浮屠巫  
祝豈能降我哉我心慢罵之揮斥之我伎有神力者三百  
餘類伺人死作燒害自古高僧碩師臨終多魔撓皆我  
之所為也其說又曰我輩或為法然日蓮弁自廢他  
廢之慢或為榮西而飛廉于京城或為普門而麗魁于  
龍山或為小野文觀勸天子討平族起元弘之亂或為  
疎石妙吉令尊氏真義失同胞之恩師直師泰非  
君臣之礼是等亦我輩所為也近代細川勝元無  
嗣祈于愛宕山而產政元政元為管領大心院死而為崇  
祭之為立祠是又愛宕之榮術大郎之屬也

貞和五年出羽國羽黑山山伏名、雲景者將往天龍寺  
遇老山伏于兩郊景與此登愛宕山見一座中有異僧  
異僧彼告曰是所謂玄昉真濟寬朝慈惠賴豪仁  
海等也其上座人々者淡路帝井上皇后或著袈龍  
繡日月星或持金笏宗德帝為金鷄展大翅源為  
朝橫弓矢侍其傍後鳥羽院後醍醐院皆同席而在  
各談世間治亂興亡之事已而景將歸老山伏告曰是  
大郎坊之所居也景如夢而醒其身惘然在于大内舊  
迹掠樹下

慶長甲寅夏叡山僧侶到駿府告衆曰頃叡山有奇

事覺林房奴二郎者一日忽失途數日歸人間何之奴曰  
有人將我去到伯列大山途中叱人人相殺又舉房揮  
空俄失火若干民屋為灰已而登筑紫彦山於是大山  
彦山之山伏相共歸時人々自愛宕鞍馬比良未會有一  
僧自上野國未座定鞍馬僧正曰久無奇怪東列西列  
合戰今其不遠愛宕大郎曰羸軻如何叡山次郎曰東  
方必勝其勢既見言已各歸本山我今見之諸人不信於是  
奴上八王子嶺躍走如平地跨神殿簷牙時々伸雙脚或  
飛巨石或擲大扉時或唱歌謠雖聞其声不識其由  
幙下聞而奇之

古事記傳七卷 龍樹靈狐形とのありしも次くことありし記  
物と可畏多し神あり木靈と俗に云ふる天狗と漢籍  
の臆魅と云ふものの物を書記舒明卷に云ふる天狗の異  
物あり又源氏物語にも天狗と云ふ事ありしことありし天狗  
とは別なること聞ゆ先と云ふ當時世に天狗といひ木靈  
とも云ふと何となく云ふことありし事実三物あり

五卷に記す天狗の事記せり

衆説によし天狗の逸獵といふも証に可なり

吾里北東に枯木杜といふ所あり八幡祠ありる所んとて風静なり  
夜火出ず隣村に杜の高樹ありり三つ或四つありし地小

降り又心と云ふ形古よりいふ形因と知る人あり或曰名劍の  
地中より其音の顯る形といふも劍音は其処にありし  
他は往來しる所より依りて按

倭漢三才圖會七十四卷 凡野外之陰火河内平固大京朱雀  
之北而後未一種之生類也好事者漫立事而已

同卷云攝津國不動院在二陸堂村毎年三月至六月有  
燐火飛行圓大尺許相傳當寺曰山伏宗名日光坊村長  
妻臥病使日光加持則入寢室祈之七日病愈焉人詭曰  
僧與婦密通也其主信讒殺之日光含憤死而後為火  
六月以後飛行于江列



ばすウツクと声なるよし雉山を此大形の地ありしと想へ  
此山海の火は皆陰火なりと云えある事なり

陰火は十三種あり

但唐太の火神は壹阿の地と云ふ事あり昔より  
い傳ふは神長文武文をわたりし山と云ふ事ありの傳  
具雲朱も亦く住来の地を必志するも其雨亦血の如  
毎年出る又稀なる事あり

天明年間より一傳は唐太よりツラヤバウカシベツノ崎へ来り  
暫時より極むる事あり唐太の方より届りて蝦夷も此神を仰  
ふ事あり或はま絶へ或は熱病なりし事ありけは何の神

なりん大詔金詔ありと云ふ事あり

揚州石霸の民曉登をんと傳ふは門内より火光忽チカラ噴く  
と云ふ事あり上はんと伝ワツト叫ひは、鋤を撃てハ手こ  
へと云ふ地は塚にほりて是は金龍と云ふ首は千金の如し  
おと云ふ地は埋りて是は後堀出りて是は真の赤金と  
云ふ事あり其地大なる事あり蝦夷の地は金山と云ふ事あり  
此唐太の神は山と云ふ事あり神は山と云ふ事あり人  
と云ふ事あり此神は山と云ふ事あり大福長者と云ふ事あり  
人より利はありと云ふ事あり

愚按に上は伝ふ事あり枯木の火は山鳥に此地は栖す事あり

雉の顔よりし尚居人の考より

● 下柙田信玄塚蜂怪

倭漢三才圖會六十九卷 信玄堂 在信玄村

武田之族一万余討死埋體於此地信玄之亡靈乎化蜂

群飛螫人大恩寺 演譽上人弔之慰亡魂于今七月十六日

燒松明里民踊躍亦其遺風也

三河刪補松曰津具村下谷村伊奈海道以上四ヶ所塚墓あり信玄塚ト云此塚より大蜂數万出依之信列伊奈

海道往未止天正三尾遠三列の寺院弔祭之故怨靈 鎮ルト云

因云倭漢三才圖會七十九卷 八幡宮在讚別高松右清尾

細川右馬頭同左馬頭合戦而右馬頭敗走於此有小祠同 神名谷八幡宮即下馬祈願之翌日對陳自虚空如袋物出降乍定馬蜂數万群飛螫左馬頭之軍兵右馬頭進討之大得勝利既後右馬頭為賽礼奉幣巖重于今四月三日立市謂之右馬頭市為高松惣氏神

愚按雖異事實蜂出而為祟一也

● 井田野 或魂魄野  
ト云フ

後風土記延徳二年己酉二月七日徳川左京亮親忠六百四十  
余人兵と卒し織田彈正少弼信秀千五百余兵と井田野に於て  
戦ひ尾羽勢敗北も首六百五十三級と得あり此後井田野  
よく討死をりけり敵味方の灵魂共時句り大勢よく  
叫喚の声喧し其外怪異多し其骸骨と捨集免  
三河国淨土宗大樹寺大冢と掘り大勢の死骸と埋  
山の如く築く千人塚と名付く其様の怪異有り故に井田野  
と魂魄野とこそやけると云是又奇異之依り附録ス

● 寶飲郡國府雷

刪補松云元録年間小府村民家此井雷落きり家亭  
麩板と覆と冠せ俵と三四俵壓とし置くと雨止と後村中の  
者告ぐ民人数百人竹鎗を打ちあはせとも雨止と後如何ある  
怖畏せしと諫々此蓋と取ると井中静よと何の事  
もなし此時俳士芭蕉翁同邑の梅可方方止宿せり  
是人も未だしと案外の事なりと皆人惘然とと大笑と  
去けり于時芭蕉翁

何の事なし便なること雷の井戸の中を流るるありと記  
是按こ是ハ形なり雷なり



又田畑に落る事有り其落る所の苗必枯是を火毒の池と云ふ

心持する畑に落る如の苗を振ると其四方に志丸繩と張ると毒気が洩れり此作物に害ありと云又按

藝苑日涉云下野相馬地方有獸如狸秋日伏地中鄉民入山祭掘斃之謂之驅雷獲獸多則明年雷少也

倭漢三才圖會二十九卷二山雷狩每正月里俗群集為雷狩獲如鼪鼯者多殺之其夏雷鳴稀矣如不狩獲則雷鳴多云

雷北説云ちくふくふく一日何故因云

唐國史補曰雷別春夏多雷無日無之雷公秋冬則伏地

中人取而食之國史補云雷別春夏日無日無雷至秋伏地中其狀如疾人皆取食

又云與黃魚同食者人皆震死

嶺南雜記曰雷出黃靈岡秋曰伏地中狀如蟻或取而食之

五雜俎曰今嶺南有物雞形肉翅秋冬藏山土中掘者遇之轟然一声而走土人逐得殺而食之謂之雷公余謂此獸也

以其似雷故名之耳彼天上雷公人得而食之耶

論衡曰圖畫之工圖雷之狀纍々如連鼓之形又圖一人若力士之容謂之雷公便之左手引連鼓右手推椎若擊之狀其意以為雷声隆隆者連鼓相扣擊之音也其魄然若敬裂者椎所擊之声也其殺人也引連鼓相推

五雜俎曰論衡所謂畫工圖雷公狀如連鼓形而四

然擊之矣世人信之莫謂不然如復原之虛妄之象也

**因**樹屋書影曰雷沃有雷神龍首人身鼓其腹則雷見山海經

軒轅游于陰浦有物焉龍身而人頭鼓腹而遨遊問于常伯常伯曰此雷神之有之則見見美農橋抽

此祖山海經耳

**搜神記**曰扶風揚道蘇田中值雷雨霹靂擊之因以鋤拾折其九股遂落地不得去色如田目如鏡毛角長二尺餘狀如六畜頭似獼猴世謂雷神即雷公也

又代列雷公取平龍擊樹樹裂急合被夾狄仁傑命

匠破得出

**青溪暇筆**云霹靂中有物如猴而小尖嘴肉翅雷收雷後亦入蟄山行之人往往多于土穴中得之謂之雷公不畏者恒為之本草則謂之震肉無毒止小兒夜驚大人因驚失心亦作哺與食之此畜為天雷所霹靂者是也

**番禺雜記**云村民鑿山為穴多岳供雷箕雷享之名曰雷藏民家女或為神所依即呼雷即得子曰雷子則雷公信有之矣

**楚詞**云施入雷淵而不可止此注雷公之室亦必有據若雷即雷子必邪神假雷号耳未可信也

玉樞經云東方有光明電王 名阿揭多 或力阿伽多

有南方者名阿軼嚕 或為刹帝嚕

有西方者名王多光 或為須陀光

有北方者名蘇多末尼

聞是名字及知方處者令無一切怖畏雷電之災

天文書云雷為陽氣而屬火云云

太平御覽云秦二世元年天無雲而雷云云

風俗通云雷不蓋舊收斂之物觸之輒變動今人新

死未斂者聞雷声屍輒漲起是也

論衡云子路感雷精而生尚剛好勇死孔子每聞雷鳴

### 中心惻怛

是等ハ唐国の論多ク大御国此書ニ見えハ

日本紀神代卷上丁伊弉諾尊驚而走還是時雷等皆起

追来云云

古事記傳ニテ於頭者大雷居於胸者火雷居於腹者黑

雷居於陰者折雷居於左手者若雷居右手者土雷

居於左足者鳴雷居右足者伏雷居拜八雷神成居

傳曰大雷雷ハ万葉三丁小伊弉諾師寺佛足石の御歌小伊

加豆知ハ此名ハ豆ハ豆延トク名意ハ嚴カク豆ハ例之通

小助辞知ハ美称アリ式ニ山城少乙訓郡乙訓坐大雷神社アリ是ハ

續記以下の史ニ依ルニ火雷の写リ誤也

火雷ハ諸雷の例より、げ多能と能と添へて讀み、或は似せし  
三代実録上のナニ保沼雷神と云るハ即火雷神と聞ゆことある  
舊訓に従ふ所して火雷の神社式ハ山城大和處ハ定か又  
和泉大鳥郡上野那波郡ありと思むをり黒雷此名他ハ定か  
次 折雷ハ佐久カ佐伎カ訓字ハ由定か、祐姑く舊より  
書紀神功成事ノ雷電霹靂ノ一般と列載しこと見ゆ  
若雷 宇遲能和紀郎子と書紀ハ雅郎子と作とこれハ此  
若も和紀より別雷といはれ傳し 式山城ハ愛宕郡賀茂別雷  
祇祓取と又ハ若雷とも式より、世も凡云記ハ依ハ若雷の意の御  
名形し 土雷書紀舒明記ハ九年二月大星從東流西便有

音似雷時人曰流星之音亦曰地雷云

鳴雷式ハ主水司坐鳴雷神社大和国添上郡鳴雷神社高  
市郡氣吹雷郷音雷吉野大國栖湯魂神社二座 伏雷此名  
他ハ見りぬらん 今雷神ハ何れも思ひぬがきし書紀の記も  
亦流河にも、之強言く 土雷書紀一書ハ雷の成る由と見  
矣次 一書ハハ色ヤサカ雷公と云ふ此記ハ成る由も其名も異形  
共古への傳りぬ今とく云傳りぬ、祐猶試しと此記ハ  
御も御是も左右ハ別成りしとあると書紀ハ、又又是の云々  
左右といぬい、之も名も一つぬ実ハ左右ハ物  
ぬれハ必二柱成坐居りしと形りかくし、之愚人の云々人

思の傍がたれは、ゆゑ理とてしめさるゝ其の體は、（イ）（イ）  
予の意あり。又雷の名は此の八種の卯も種々他書にも見えゆ  
將雷の事と陰陽と云物の理とていふ所は、（イ）論六例の漢意  
とて是く古傳は背あり凡そ雷は此見えたる如く、伊邪冊  
英大神の大御身と成り、豫母津国より起る物とて是く怒と死  
人との後又雷なりとていひゆること昔も今もあはれは故  
とて古事記傳にも見えし事も其形と論するものあり按

**傳漢**ニ才多會ニ傳理學類篇曰胡氏曰雷霆者未之言  
然先達大儒嘗明其理云又按

**門** 五十七 雷本火塊中雖有物象親不克見不能捕故劉尚

之所圖如力士及赤鬼亦附會耳揚道和之格雷眩押之亦妄  
也蓋雄畧之剛毅蝸贏之勇力所人知也愚考去神代也  
不甚遠天神假雷行勢而諫之令懲之者乎又按

**穀梁傳**云陰陽相薄感而為雷云淮南子もかく載する所も  
象と論する所も大御國ニイカチト訓スニ松と思フニ巖の  
稜威<sup>ミツ</sup>の形なり今所々處處に此の獸の形を有るハ雷の表<sup>トコロ</sup>は  
其勢と假るる所も獸も其の雷も其の事とていふ

**因**云傳漢ニ才多會ニ傳嘉榮草不載其形今有草名加  
未止此其類乎俗云波布天古大良 似桐木 桑此二種亦能

防雷霆

長篠淺畑村間大蛇

**刪補**松云長篠と淺畑村の間向ニ大木の枝五六本有り  
其枝の内ニ祠有り此処ニ岩窪有り三尺中四尺をうりあり  
此穴ニ大蛇住むと云傳近所腥氣有り山人と近所へ行と  
以次若し過行くと其えと文の時煩ふと云此蛇夏夜中飛と  
又淺畑村馬崩と云所へ通ふと云其象と云きふとの二月と  
煩ふと云蛇の長サ五六間頭四斗指程ありと云

**正徳**年厩吉田駅人設樂郡園田村長泉寺へ行り寺より  
四五丁前の山中ニヒウくと鳴物有り何れんと木と分りえんば  
六七尺の蛇木に登り居り口を空ニ向くと啼く不思議と思ひ

えきふは俄に其れと云黒雲覆と闇夜の如くなりと疾風  
迅雷影に故潮寺へ多分此事と語り寺僧答曰蛟龍也  
此邊中、有此事、早く立退、故、無難と云

**設樂**郡須美村夏目安兵衛と云者新城井道と云所より  
松の大木川端に有りと曳りきんとせしは松木より大蛇也  
忽ち倒れん故早く遁帰と云二三日たす其所へ行くと見ま  
大サ五六分程此鱗八枚有り此内ニ枚ハ新城領主御藏の納の  
残三枚今ニ家藏と云

**享保**中吉田新銭町裏民家の井とわゆる井の中より  
二尺余の蛇二三足曳上り何れとも年有り奇物故捕んとせしは

竹藪の中又入<sup>ク</sup>行方と云<sup>ク</sup>云

因云蛇錯古作它象其宛轉屈曲之形今从虫作蛇  
時珍曰諸蛇出以春但以春夏為晝秋冬為夜冬蟄  
含至春出則吐出其舌雙其耳聾而聽以目其蟠向  
士方其毒有涎怒時在頭尾其珠在口其行也紆其  
食也吞有牙無齒故也交則雄入雌腹交已即退出  
也人見見蛟交三年而死見蛇交主有喜入水交石  
斑魚又以龜鬣為此入山與孔雀匹與雉交也愛憐  
蛇憐鼠蛇吞鼠而有食之鼠蛇吞蛙而有制蛇之  
蝦蟆名曰蛇所食之與則蛙鼠雀蝙蝠鳥雛所食之

草則芥茄石楠菜萸蛇粟所憎之物則蓑荷菴蔞  
蛇芮草鴛鴦糞所畏之菜則雄黃雌黃殺羊角

蜈蚣

蜈蚣見大蛇能以氣禁之啖其腦眼蟾蜍食蜈蚣蛇  
食蟾蜍物相畏也誤觸蒿菜則目不見物

蛇蟠人足淋以熱尿或沃以熱湯則解蛇入人竅以  
艾炷灸其尾或割破蛇尾塞以椒末即出

或謂蛇有足見之不佳惟桑柴火灸蛇則足見不足  
怪又五月五日燒地令熱以酒沃之置蛇于地則足見

按蛇呼大者名予呂知用字音又稱倍美倍美者及鼻也小蛇

之總名曰久知奈波言似朽繩也近世未於阿蘭陀治蛇  
蠶之菜有小黑名各須羅<sup>スラ</sup>牟加須<sup>ムカス</sup>天有樹名波布<sup>ハフ</sup>手古<sup>コ</sup>不羅<sup>ラ</sup>  
有草名留<sup>ル</sup>宇<sup>ウ</sup>駄<sup>ダ</sup>此二種今處々有之能治蛇毒

凡龍蛇皆紆行而有四足者為龍屬無手足者為蛇屬  
然龍蛇本一類矣春夏見龍升天者住々有之或人乘舩  
過琵琶湖着北濱少頃納涼時有尺許小蛇游水上蘆梢  
廻舞下游水上十步許復還上蘆梢如初數次漸長為丈  
許蓋此升天行法乎於是黑雲掩如闇夜白雨降似  
車軸龍升天逸見尾遂入大虛而為晴天  
造化權輿云龍易骨蛇易皮麋鹿易角蟹易螯

### 蛟龍

官毗羅梵書和名美豆知

本綱蛟乃龍屬其眉交生故謂之蛟長丈餘似蛇而有  
鱗四足形廣如楸小頭細頸有白嬰胸前赭色背上青  
斑脇邊若錦尾有肉環大者數圍其印亦大能牽魚  
飛魚得鱗可免

**山海經**云池魚滿二千六百則蛟未為之長

**五雜俎**云閩中不時暴雨山水驟發漂沒室廬土人謂  
之出蛟理或有之大凡蛟蜃藏山穴中歲久變化必  
挾風雨以出或成龍或入海



及ぶものなり甲の上は苔むす草木と生し眼の光  
天と射螯と抗足と運し人とな食する折なり

玄中記云天下之大物有北海之蟹焉舉一螯能加於  
山上身在水中又

山海經云姑射國大蟹在海中蓋十里之蟹也

又女丑有大蟹廣千里注ヤリ

蟹錄云眉公書蕉多西方山中有人焉其長尺餘袒  
身捕蝦蟹性不畏人見人止宿喜依火以炙蝦蟹伺  
人不在而盜火籃以食蟹名曰山猿其言自叫人常  
以竹箸火中烘燂而山猿皆驚犯之令人寒熱

菽園雜記云松江沈宗正每深設齋於塘下畧

元亨秋書曰蟹滿寺云云

五雜俎載唐天寶間當塗氏劉成李暉以巨舫載  
魚有大魚呼阿弥陀佛俄萬魚俱呼其声動天

晴川亦云聖朝續集云唐天寶間宣城劉成舟

中聞蟹呼佛云云

かゝる怪談蟹といふやみかり

蝦蟇劇

安永三年正月六日より八日と三日の間岡崎六供蝦蟇  
数百足集り劇諺は三日の間同刻なり其後行方不知

因云倭漢三才會五十四卷蝦蟇 遐蟇 和名加閉流

俗云加波須雖遐之常慕而返故名之和名亦然

本綱蝦蟇在陂澤中背有黑點身小能跳接百蟲解

作呷呷聲舉動極急蝦蟇青龜畏蛇而制蜈蚣此

三物相值彼此皆不動蛇螫人具牙入肉中痛不可堪者揭蝦蟇

周礼蝮氏掌去鼃黽焚牡菊以灰洒之則死牡菊無花菊也

黑虎 身小黑嘴脚小班

蚰黃 前脚大後腿小班色有尾子一條

黃蛭 遍身黃色腹下有脊帶長五七分住之處帶下有自然汁出

螻蛄 即夜鳴腰細口大皮蒼黑色月令所謂孟夏螻蛄  
鳴者是也與螻蛄同名

按蝦蟇種類甚多或時有蝦蟇合戟以為不祥

續日本紀云称德帝時神護慶雲二年七月肥之八代郡蝦蟇陳列

廣可サカ七丈南向去及日暮不知去處桓武帝時延曆三年春

蝦蟇二万許從楨列難波南行池列可カ三町入四天寺内悉

去

著聞集云後堀河帝 寛喜三年夏日 高陽院殿南有堀  
蝦蟇數千為群左右相構而戰或交殺半死如此數日  
京師人爭見之 其外蛙合戰古今不少

河州錦部郡天野近處有田名西行田限畔蛙不鳴

如此外亦間有之

大日本史七十三本紀七十三云明德十五年戊子春二月六日乙酉有  
蝦蟆闘于權大納言足利義持第 和漢合運 和漢合符

● 南海蜃樓

冬河國涇美郡五十<sup>子</sup>崎尔蜃樓顯る古も云傳る蓋  
蜃氣樓形とももの海邊の人ありしこととるいかに蜃氣  
の形<sup>アミシウ</sup>龍<sup>リウ</sup>よく似るが氣を吐て何れも其氣空中より立  
のゆりて宮殿樓閣画くことありしをいふる唐土よりい  
蜃樓とも又海市とも名つたり亦一説は蜃の形蛇の如く  
大きく腰下<sup>ウサ</sup>鱗<sup>リン</sup>は水逆<sup>ミヅサガ</sup>たりともい説られ亦その形<sup>アミシウ</sup>龍<sup>リウ</sup>似て  
角<sup>ツノ</sup>有り耳<sup>ミミ</sup>有り鬚<sup>ヒゲ</sup>有り紅色といふ説有り又雉と蛇と交ま  
蜃とせしと聞え或は蜃は是龍之池及井よりともいふ氣を吐く  
雨とけし海よりともいふ氣を吐く宮殿と形似るは世俗の所謂

車螯<sup>ウシエ</sup>  
時珍云林書  
謂之牟螯名  
揮位婆  
并いかにい  
若水本草  
トフカヒ  
蜃樓畫圖下  
大蛤<sup>オホカ</sup>画<sup>エ</sup>ハ誤也

龍宮城の蜃氣樓と記すところありしは又一説に蜃  
は大蛤之故海中の車螯ウミシナガキと蜃とを同しり。又蜃と蛤シガイとを同し  
りといふも訓められしごとく古人の誤りなり。蜃と蛤とを同しり  
いふはよく變化して人と言ふるに至るは蜃といふは二種ありし  
海中蜃氣樓と名けしもの蛸龍イモシロウの屬なり亦雉大水に入ると  
蜃と名けしもの雉本蛇の化るといふもの類ありしは  
はとと蛤とを同しり遠く信蜃氣といふもの海氣の大凡海水の  
精多く詰りし形と似し散りし光と名けしもの蜃の氣  
といふ所とす東海道名所備考那古浦蜃樓記并昔語質屋  
庫等の書と併考せし

●長篠蛸

宮嶋傳記曰古老語曰此長篠陳ノ後ニ吉川下蛸  
ノ集るは夏影敷前代未聞ノ夏蛸ハ人ノ血ヲ吸フ物ニヤ彼  
死骸ヲ喰フカ故ヤト新セシ也

